

あゆみ通信

VOL153.

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

絶対他力の大道

清澤嵩之師(林克宇先生訳)

第4章

「無限他力」は一体どこにあるのでしょうか。

この自分にいま与えられているものの中にあります。たとえばそのお与えがどんなに貧しくあろうとも、それがそのまま絶対他力の現れであります。私共はこの与えられたままの自分を尊び、これを大切にすることによって、如来の大恩に感謝すべきであります。それなのに私共はこの自分の内に足ることを知らず、外に求め、人の力に頼って満足を得ようとしています。これこそ大きな迷いと言うべきではありませんか。

満足を外に求めるのは貪欲の因であります。幸せを得ようとして人に頼るのは腹立ちの因であります。(つづく)

悲しみの縁を足かりに

日常の齷齪した生活の中で父親が1994年に、母親が1998年に亡くなって、一切の仏事を自分がすることになり、再就職した仕事を辞めて、父母がお世話になった即應寺に、義理のつもりで仏事に参加。実家の隣のおじさんが総代をしていたのを知る。毎月のお寺へ行く傍ら友人と四国88か所巡拝の旅を2年で結願。浄土真宗との違いを体感。宗祖親鸞聖人の教えに興味を持ち始めた頃、善隆住職(当時)の勧めで第2組養成講座に参加。本山研修を修了して阿倍野界限のお寺の垣根を超えた仲間を得ることになった。

この自分自身の劇的ともいえる転換を善隆住職は、次のように言い当てておられます。「身近な人を亡くしたことがご縁で、仏様の教えを聞くようになられた方はたくさんおられます。大切な人を亡くした悲しみが語りかけている意味を、残された者が聞き取り教えられ、そこから新しい人生のあゆみが始まっていくことが願われているのでありましょう」聞法第一。(本)

引き算

池田勇諦先生

私たちは何か仏法を解ろう



としているのであって、仏法をまったく聞いていないのです。それが今日の私の姿ではないかと思うのです

ね。仏法が私に何を願って下さっておるのかと言うことを、全く棚上げしてしまって、(中略)私たちは解ろうとしている。解れば救われるだろうと思うのですね。私たちの妄念、妄想の分別の桁で、仮に解ったとなっても救われないのです。

私たちは私とか言っているのですけれども、私と言えないものが混じっているのですね。それをごちゃ混ぜにして私だと言っているわけだからはたしてこれが本当に自分と言えるものなのか、そこを一度点検して自分とは言えないものだということだというのが判明したら、それを引けと言うのです。

では、自分のものか、非自分(自分にあらざるもの)か。それを区分けする基準は一体何かと言いますと、仏教は「無我」と説かれています。われ無し。自我意識で考えているような、われは無いと言うこと。ですから自我意識のわれによってそれが存在し、自我意識によってどのようにならば、それは自分のものと言えるし自分と言える。だが、そう言えないのであれば、自分のものとは言えない。自分とは言えない。ならばそれを引かなければならない。

私の財産とわしづかみにして

いますけれど、私の自我意識で存在して、自我意識の支配下にあるものなのでしょ

うか。万事因縁と教えていただくのが仏教であります。すべては内なる条件と外なる条件の出会いによって生起してくる。条件次第と言うことですね。いくら自分がああなりたと思っ

たって、因縁が整わなければなりませんね。反対にあんなことに会いたくない、あんなものはこちらへ来てもらいたくないと思っ

あゆみの会総会 ご参加をお待ちしています

ても、因縁が整えば待たなしにあらわれてきます。因縁と言うことの厳しさでございます。物事は条件次第と言うことですね。そうすると私の財産と言っ

てわしづかみにしていますけれど、実は因縁によってあらわれ、また因縁によって去っていくものですね。(「真宗の生活」2010年より抜粋して)

待ちに待ったあゆみの会総会。

コロナウイルス感染拡大で、長い間お仲間の顔を合わせる事が出来ませんでした。

その間、年齢を重ね、健康や体調不安と、聞法の機会が閉ざされて、心かええることもあり。仏法のご縁による絆が切れるのではと心配しています。でも、私たちは宗祖親鸞聖人の教えをいただ

いています。真宗本廟の御景堂での誓約を思い、同窓会をやりましょ

う。

日時 12月12日(日) 13:30

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)

内容 総会(事業報告、会計報告、事業計画、予算案) 法話

講師 藤井善隆即應寺前住職

2022年会費は、役員会で協議し徴収しなくなりました。) すでに預かりました方は、来年の年会費に当てさせていただきます。

第2組報恩講肅々と



コロナ緊急事態宣言解除を受けて、久しぶりの第2組報恩講が11月11日(木)午後2時から阿倍野区の即應寺を会場に、組内の11カ寺の住職、坊守さんとご門徒や推進員の39人が参加して、厳粛に開催された。



喚鐘の合図で11人のご住職方の出仕があり、勤行が始まった。正信偈は草四句目下、念仏讃は洵三、和讃は「弥陀大悲の誓願を」次第6首、回向は「願似此功德」を、全員で称えた。

休憩をはさんでご法話は、第9組昭徳寺住職の山口知丈先生から「『あるべき』と『去るべき』一明恵上人と親鸞聖人」と題してお話いただいた。



先生は、「人は、それぞれのあるべき姿を守り生きなさい」という明恵上人と、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」「そくばくの業をもちける身」(「歎異抄」)の親鸞聖人を紹介し、私たちの選び取るべきは?について紹介された。引き続き短い時間ではあるが、同朋総会が友澤

秀三住職(南照寺)の司会で進められ、数人のご門徒から「同朋の会開催について」や

「門徒や推進員の高齢化による第2組の寺院や門徒会、組推協あゆみの会について」等の発言があり、午後4時半過ぎの閉会となった。



如是我聞 山口先生のご法話

細川克彦(佛足寺)



講題は「あるべきとさるべき」で、サブタイトルが「明恵上人と親鸞聖人」を挙げ、先生のお寺の同朋の会で、あるご門徒から「これだけ聞法したら、ちょっとはましな人間に成っただろうか」と、問われたことがあり、そのことが今回のテーマになったと。

明恵上人は1173年、親鸞聖人と同年のご誕生で、同時代を生きられた方である。上人は比叡山の学僧として、京都梅尾に高山寺を開かれた。戒律と修行を重んじ『明恵上人遺訓』として「人は



あるべきようは阿留辺畿夜宇和の七文字を持つべきなり。(後略)」と述べられ、人はそれぞれのあるべき姿(当然)を生きなさいと教えられた。社会規範として一



面大切なことであるが、人には「あるべき姿」が保てない時もあるのではないかと。そんな時はどうなるのか。

一方親鸞聖人は生涯に4度の大飢饉にあわれ、その中で生身の人間に出会っていかれた。

第37回第2組同朋大会は、2022年3月5日(土)に午後1時30分から御堂会館Aホールで開催。お勤めと法話の講師は酒井正夫師(三重教区道争寺前任職)



『歎異抄』第13章では「さまざまな営みをして、いのちをつぐともがらは、【さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし】」(趣意)と、生きていくためには、どんなこともしていかねばならない現実があること、また



『歎異抄』後序には【そくばくの業をもちける身】と言われ、人は抱えきれないほどの人生のしがらみの中を生きざるを得ない生身のありのままを見ることが大切ではないかと。

釈尊の言葉に「あわれ命あるものは、互いに喰みあう」とある。命をもっていること、生きることは本来壮絶なものであり、「あるべき姿」を保てない現実をそのとおりに見ていくことが大事であると。

釈尊は「四法印」において、「諸行無常、諸法無我、一切皆苦」と教えられている。親鸞聖人との出会いとはましな人間になることではなく、ありのままの、正直な自分に出会わせていただくご縁なのではないかと、ご自身の見聞きされた体験を交えて、やさしくお話しいただいた。